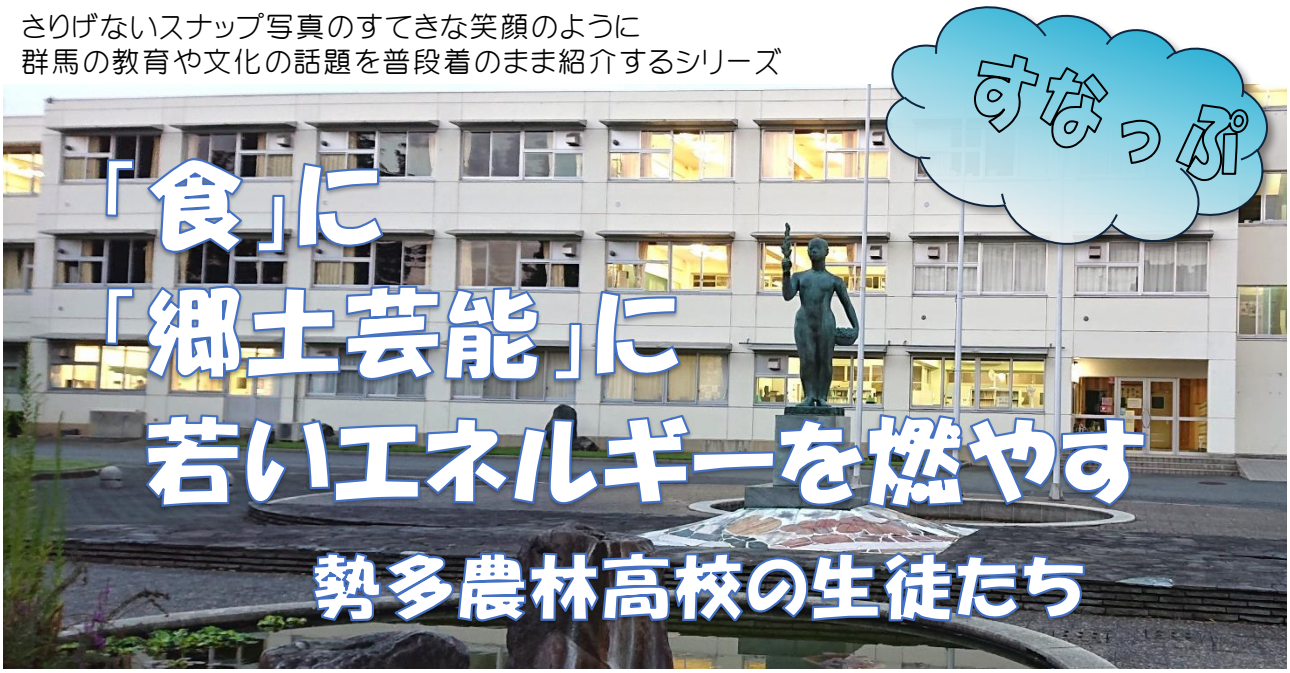
さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題を普段着のまま紹介するシリーズ



「食」に「郷土芸能」に若いエネルギーを燃やす

勢多農林高校の生徒たち

９月の下旬、私たちは、群馬県立勢多農林高等学校（勢多農）を訪ねました。校舎の前の広場では卒業生の彫刻家吉田光正氏制作の若者の像が迎えてくれ、校舎の北には広い農場が広がっています。この敷地以外に、上泉農場と赤城の演習林があります。勢多農林高校は、明治４１年に勢多郡立農林学校として開校し、今年度、１１５年目を迎えました。創立以来、農業教育の拠点校として送り出した２万名を超える卒業生は、県内のみならず広く産業・経済、政治、教育、文化など各方面で活躍しています。教育目標及び目指す学校像は以下の通りです。

① 食料・環境・生命・健康の関連分野を担う「将来のスペシャリスト」として必要な基礎・基本を身に付けさせる。
② 各分野の課題解決に果敢に取り組む前向きな態度を養う。
③ 明るく活気に満ちた学園での生活を通して、職業人としての豊かな人間性を育む。
④ 地域社会や農業関連産業の発展に寄与できる有為な人材を育成する。

令和３年度入学生から学科改編が行われ、「植物科学科」「植物デザイン科」「動物科学科」「緑地土木科」「食品科学科」の構成になり、時代のニーズに応えています。

「全国和菓子甲子園」「ご当地！絶品うまいもん甲子園」に出場

このユニークな二つの甲子園、美味しい物には目がない私たちは興味津々。出場する食品科学科の生徒さんと、監督を自称する田中良子先生にインタビューをお願いしました。

「和菓子甲子園」

和菓子甲子園決勝戦は、８月２６日、書類審査を通過した９校１２作品が頂点を争い、２年の木村佳愛（かえ）さんと佐藤日海（ひみ）さんのチームは、優勝、準優勝に次ぐ特別賞「全国菓子研究団体連合会会長賞」を受賞しました。

さて、その作品とは？題して「宝石が魅せる青春の彩」。上品で見るからに美味しそう！焼きまんじゅうのタレを絡めた胡桃と甘く煮た花豆を白あんで包み、その白あんにはトマトパウダー、レモンピールが入ってい

宝石が魅せる青春の彩

ます。キラキラ光っている外側は錦玉（きんぎょく）、皮は求肥（ぎゅうひ）です。

木村佳愛さんは「和菓子に興味があり、将来和菓子職人を目指しています」とのことで、親友の佐藤日海さんを誘って出場しました。1時間45分の制限時間内に仕上げるために、３カ月かけて練習しました。もち米の粉でできた求肥を皮にしたのは「日本のお米」がテーマになっているからです。

木村佳愛さん（左）と佐藤日海さん

「うまいもん甲子園」

「うまいもん甲子園」は全国から３２３チームが参加する大きなイベントです。出場する３年の宮嶋春佳（はるか）さん、阿久澤良奈（らな）さん、山崎歩乃莉（ほのり）さんは、８月に開催された関東甲信越エリア選抜大会を１位で通過し、11月の全国大会に臨みます。作品の「群馬のお好そば焼き（おこのみそばやき）」は、中身の具材にこんにゃく、ねぎ、枝豆、コーン、太田焼きそば等が入り、焼きまんじゅうの味噌だれがかかっています。田中良子先生によれば「群馬県の食材をふんだんに使った仕上がりになっている」とのこと。ワッフル型で焼き、「誰でも簡単に食べられる、新しい食べ歩きグルメ」と若者らしい発想です。

「群馬のお好そば焼き」

１０月２９日（日）に桂萱西部公園で開催される「ミツマタマルシェ 2023」に出品する予定ですが数量限定なのですぐに売り切れそう！

めざす進路は

３人に卒業後の進路を聞いてみました。「調理人になりたいので専門学校に行きます。やがては南極に行って隊員のために調理したい」という山崎歩乃莉さんの夢にみんなびっくり。阿久澤良奈さんは病院の管理栄養士を、宮嶋春佳さんはファッション系のデザイナーを目指しています。「うまいもん甲子園」大舞台での経験は、きっとこれからも生きてくることでしょう。

★大会への出場経費は、勢多農林高校がアンバサダーになっている「群馬県醤油味噌工業協同組合」からの予算を活用しているとのことでした。（大会での写真は田中先生に提供していただきました。）

関東甲信越エリア選抜大会で

山崎歩乃莉さん、宮嶋春佳さん、阿久澤良奈さん

「郷土芸能」の魅力にはまり成長する高校生
―全国総合文化祭へ、地域へ―

廊下を歩いていると、調子のいい太鼓の音が聞こえてきました。案内された大きな会議室で、今年の夏、奄美大島での全国総合文化祭（総文祭）出場を果たした「郷土芸能部」の生徒たちが１１月の群馬県総文祭に備えて練習していました。大太鼓が８台、小太鼓が２台の演奏はとても迫力があります。しばらく練習風景を見学した後、顧問の下田勇人先生の計らいで、別室で４人の生徒さんにインタビューさせてもらいました。

県大会で初の最優秀賞→全国へ

愛好会からスタートして１７年目になる勢多農の郷土芸能部は総勢１９名。昨年秋の県総文祭で上州八木節音頭を演奏して最優秀賞に輝き、今年８月の奄美大島での全国総文祭出場権を得ました。その時のメンバーである現在の２～３年生１４名で出場しました。

Q：まず、奄美大島で開かれた全国総文祭の感想を聞かせて下さい。

樋口涼音さん（すずね）（３年、前部長）：初めての出場で、わからないことばかりでしたが、北海道から沖縄まで、文化も地域も違ういろいろな方々に出会い、全国の特色ある演奏を観られて感動しました。

Q：「上州八木節音頭」を披露したんですね。

五十嵐夢乃（ゆめの）さん（２年、副部長）：はい、がんばって唄いました。

樋口涼音さん：踊りは、唐笠から始まり、菅笠、銭太鼓、花輪、手踊りと続きます。唐笠は、地域の上州桂会の方々が新しく作って下さいました。音頭が叩く樽も新しく作っていただいたものです。（※「音頭」は主たる演奏者）

左から樋口、浅川、小林、五十嵐さん

全国総合文化祭で（写真提供下田先生）

下田勇人先生：元々、西片貝町にある上州桂会の方々のご指導を受けており、昨年も何度か来ていただきました。地域のみなさんからは本当に多くのご支援を受けています。」

入部のきっかけは

Q：郷土芸能って、若い人には人気がないような気がしますが、なぜ入部したのですか。

小林大河（たいが）さん（２年、副部長）：新入生歓迎会の時に先輩方が和太鼓を披露してくれたのですが、その時、カッコイイと思って。

五十嵐夢乃さん（２年、副部長）：中３の時から学校案内のパンフレットで見て知っていましたが、新入生歓迎会で見てやはりいいなあと思って。

浅川竜生（りゅうせい）さん（２年、新部長）：新入生歓迎会の時に和太鼓の音に胸がどーんとやられて、体験入部に行きました。和太鼓をたたいた時に、気持ちが楽になり自分が一番リラックスできるかなと思って入部しました。

樋口涼音さん：私は中学で吹奏楽をやっていて元々入る気はなかったのですが、新入生歓迎会の時に先輩方がカッコイイなと思って。

郷土芸能部の魅力は

Q：郷土芸能部で活動していての喜びを聞かせて下さい。

浅川竜生さん：最近コロナが明けてイベントに呼ばれることが多くなって、地域の人に自分達の演奏を届けるのですが、終わった後に

涙を流しながら、感動した、元気をもらえたと言ってくれて…。自分たちの演奏が小さな子から大人の人まで、全ての人に届いているんだなと感じてやりがいがあります。

五十嵐夢乃さん：演奏することでお客さんが元気になってくれたり、笑顔になってくれたりするので、自分たちもやってよかったなと達成感が味わえます。

樋口涼音さん：私が教えたことを下級生が理解して頑張っている姿を見た時に、部長として嬉しくなります。

苦労は？悩みは？

Q：苦労したり、悩むことはありましたか？

浅川竜生さん：新しい曲を覚えるには、動画を見ながら覚えるのですが、それでもわからない時は悩みます。そういう時は先輩に来てもらって教えてもらいます。

樋口涼音さん：私は全国に行きたいという思いがあったから、自分たちの代で賞をとろうと圧をかけた時もあります。

五十嵐夢乃さん：情熱が伝わりすぎて、強い言葉で言われたこともありました。

樋口涼音さん：自分の気持ちを伝えるために指導の資料も見ました。いろんな団体の演奏も参考にしてメモしました。今年の八木節は、部員たちで話し合ってアレンジしたので良いものができたと思います。

先生の関わり方は

Q：先生の関わり方はどうですか。

樋口涼音さん：悩みもあったけど、先生に相談すると、大丈夫だよと言ってくれました。

下田勇人先生：基本的には自分たちで考えて活動していくことを大事にしていますので一歩離れてみていました。郷土芸能部の活動を通して生徒が成長していることを感じますね。人間力がついてきています。新メンバーの八木節は完成度が高く、表現力に磨きがかかった演舞になったと思います。

これからの目標は？

浅川竜生さん：１１月１２日に今年の県総文祭があるので、それに向けてがんばっています。和太鼓は２年の８名だけで「Ambitious」という曲に挑戦して、入賞を目指します。上州八木節音頭では１位を目指します！

取材を終えて

青春を精一杯生きている高校生に、私たちも元気と勇気をもらえた時間でした。

食にまつわる全国イベントに挑戦した生徒たちはみなお菓子が好き、食べることもつくることも好き。好きなことに夢中になって甲子園出場を果たしてしまった。内から湧き上がるエネルギーが自然に実を結んでいると感じました。微笑みながら静かに生徒たちを見守る田中良子監督の存在もさぞかし心強かったことでしょう。

郷土芸能部の活動もまたすばらしい。「演奏して気持ちがいい」「地域の人々に感動を届けている」という実感を味わいつつも、時には方針についてぶつかり合い、課題を乗り越え、目標に向かって突き進んでいます。教師は生徒の自主性を尊重しながらそのエネルギーを受けとめ、全国総文に導きました。部活動の理想的な姿をみました。

校長先生をはじめ、放課後の活動で忙しい中、取材陣を迎えてくださったみなさまに感謝します。《取材・撮影：瀧口典子・平井敏久・倉林順一》